

# NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR  
PARAPSYCHOLOGY

DECEMBER

No. 20

## 日本超心理学学会 第12回大会

日本超心理学学会第12回大会は、1979年12月22(土)、23(日)の両日、東京・中野・サンプラザ・第1研修室において行われた。出席者34名(内学生12名)、会員以外の参加者2目主、入会希望者も多くあった。22日午後に10人研究の発表が8名、23日は、午前シンポジウム、午後に討論会が行われた。続いて記念写真撮影の後、総会が開かれ、人事及び会費の件について運営委員会の案の通り議決された(後掲)時刻は新宿Isetanアパルトメントにおいて懇親会が開かれ、6名の参加者があった。

研究発表は、実験的研究、理論及び偶発的事例の調査と広いテーマについて行われ、鹿児島大学の大尾直樹氏と鹿児島大学の黒田輝彦氏は、学生に於て集団ESP実験を行い、ESP得点の信頼性と性格特性との関係を調べた。その結果、一部シリーズ間に相違が見られること、外向性の者が高い得点をとる傾向があることが観察された。防犯学校の大谷宗司氏は、同氏が1955年以来行って来たESP実験及び、特にESPの日内変動を観察する為に行った、集団及び個人テストの結果から、ESP得点は測定時刻により変動すること、午後のテストではdeclineが明瞭であることを示した。またこの種研究では心理的条件の制御が重要であることを指摘した。日笠製作所大車正道氏は、コンピュータを用いたESP及びPK実験で、テスト中妨害刺激を入れたと、その直後得点の低下が見られること、妨害刺激直前のtrialで得点の上昇があることが観察されたことを報告し、特に後者は予知の効果であると述べた。松井病院の望原敏雄氏は、Remote Viewingについて、これまで行われた諸実験を紹介し、続いて同氏が行った実験について報告した。実験は医師、心理学会、看護婦の参加により行われ、互に実験者、送り手、受け手となり、targetの範囲を病院の建物内部として行った。感知的手摺り、推理防止には十分な注意を払った。結果の中に送り手の描画と受け手の反応の向に希しい対応の見られるものがあった。山崎診療所の長崎鋼典氏は、抗うつ剤イミプラミン、眠剤ジアゼパム、静穏

剤メタゼパム、ロラゼパムのESPに対する効果を調べた。薬の服用前、30分後、60分後、120分後にテストを行い、その結果、ロラゼパム服用後30分まで有意に高い得点が見られた。

東洋大学の恩田壽氏、創造性研究の見地から、Psi能力の発現のため心身エネルギーの有効使用、目標設定のためimageの開発、解決への確信、Open mind、心身の弛緩、情報入手過程、認識が重要であることを論じた。行方高等学校の金沢光基氏は、Psi現象説明のためpsychonという粒子を仮定し、これは通常主体の周りに凝集しており、心理的意図によりこれが光速以上、光速、或は光速以下で運動するとすれば、予知、透視、テレパシ、後述の現象が説明できると論じた。

大谷氏の偶発的事例調査は、日常生活の諸事象中、Psiの因子の含まれる度合いを測定し、且、Psiの発現、体験者の心理、生理的特徴を明らかにしようとする調査作りの為の予備的試みであり、本結果ではPsi体験の男性に多いこと、Psi経験者が通常厚皮の奇帯を見ることが多いという傾向があることが報告された。

シンポジウムの題目は"Death, Survival and Reincarnation"であった。これまで本学会でのこのような問題の討議はなかったことはいない。しかし、司会の金沢氏が述べたように、Rhine以来実験室方法によってESP、PKが証明された後、研究のテーマはこの領域が嘗て心靈研究と呼ばれていた領域内題であったテーマに注意が向けられ、P.A.の大会でも発表されるようになった。我々方々もこれらに関心をもち、特に望原氏のOsis及びHaraldssonのdeath bed experim.調査に関する著書の翻訳以来、本学会内にSurvival研究委員会を伴う動きが進んでおり、今回の企画は時宜を得たものと思はれる。

講師として金沢氏、望原氏、長崎氏、更に大阪PL病院の中川俊二氏も訪れた。金沢氏はSurvivalを示すとされる事象の説明に"存続仮説"と"死滅仮説"がありとし、前者はpersonality全体の存続、部分(意

識(下意識)の存続、非心的存在の存続を肯定する立場があり、後者は Super-ESP 仮説と 1-マールは原因で説明する立場がある。そして、Survival の可能性を予後する事実はあるが、死滅説を積極的に肯定する事実はないこと注目すべきことを指摘した。望原氏は、之等事象について、積極的に実証的研究している者が近年に増加すること、統計的手法を用い精密な研究を指向する努力もあることを示し、特異事例として日本人の再生と称するビルク女性事例と興味深く説明し、I. Stevenson, Univ. of Virginia は日本にも 300 例位あると予想している。機会があれば調査したいと希望を述べた。長嶋氏は、同氏の報告に一時的主観的見解を述べ、また、同氏自身が、死した患者の影を見る体験を述べ、来世仮説は、安心して死ぬに有用であることを強調した。中川氏は、自身の体験を含めガンの自然退縮の存在すること、また、ガンを宣言した患者が心理的転換をりることにより、ガンの生長を抑え、予想以上に長く生き、その間明るく積極的意義ある人生を送っている例を述べ、これらの場合、検査の結果、悪化が高まっていることが証明され、心身相剋の重要が事実を平定していることを説明した。

討論会においては、日本女子大学教授天羽大平氏(心理学)が「宇宙の超時空的共有」と題して話題提供を行った。同氏は因果律を認めずにはあり、宇宙を認めぬ必要があり、肉体を超えたXの存在を肯定しなければならぬといひ、脳神経系を通じて形而下のものを感じると共に、超時空的存在であるXをも感知する器官である。脳は過去の記憶、現在の判断に加え、未来を予知する能力即ちXを感受する。そしてこれらの働き、創念、及びこれらXの感受(超心理学的働き)の中心であるかを定位置るための脳波実験を計画中であることを述べた。

3日午前午後のテーマは関連する所が少なく、両者において、高いレベルの活発な討論が交わされた。この事は、我が学会の長年の努力により超心理学についての理解が深まったこと、超心理学的現象に対する科学的パラダイムが堅固になって来たことを示しており、中川、天羽両氏を会員の反響に感謝を受けたいと述べておられた。

本大会は、以上の様に充実した意義ある大会であった。本大会は会員全部の協力によって実現したものであり、多数の方々から準備金の寄附をいただき支障なく開催できましたことをお礼申し上げます。また本大会に対し、元東京大学教授小望原慈瑛先生(心理学)元石居大学教授高木健太郎先生(生理学)から激励の御言葉をいただきました。大変に有難く感謝しております。

### 会務報告

去り、1979年、2月23日、6時20分より、7時の間、中野カンパウザに於て昭和54年度日本超心理学会総会が開かれ、下記の事項が決定されました。

#### 記

1. 日本超心理学会第2代会長に大谷崇司氏を任命する。
2. 同じく運営委員長に金沢光基氏を任命する。
3. 新たに運営委員に長田一臣氏と松田守氏を、幹事に萩原重樹氏を任命する。
4. 昭和55年度より、年会費を正会員5000円、準会員3000円とする。

前会長小野虎之助先生が長くお務めから早や1年が経過しました。こゝに新しい体制を整え、小籠先生が示された方向である科学的超心理学を推進し本学会を発展させたいと思ひます。会員の皆様の強い御協力をお願い致します。

### お知らせ

#### 第139回月例研究会

- 下記要領で1月研究会を開催致します。
- 日時、1980年1月20日(日)1000~1600  
 ところ、学士会館本館 東京・千代田区神田錦町3-28  
 03-292-5931 地下鉄東西線 竹橋下車
- 報告 青田益章氏のスポンジゲル実験中の報告  
 - 脳波的研究 - 郡 鶴彦氏
- 輪読 Hand book of Parapsychology 呂 芳一  
 担当